奏

2011 AUTUMN Vol.36

JCMF

公益財団法人 日本室内楽振興財団

座談会

第七回 大阪国際室内楽コンクール&フェスタを振り返って

新緑爽やかな五月、いずみホールで第七回「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」が開催されました。今回は図らずも東日本大震災後の開催となり、一時は実施も危ぶまれるような事態となりましたが、海外から多くの団体も参加し、関係者の皆様のご尽力のおかげで無事終えることができました。そうしたことも あり、今回のコンクール&フェスタは特別な回となったようです。さまざまなエピソードも含め、今回、深く関わって頂いた方々にお集まりいただき、貴重なお話を伺いましたのでご紹介しましょう。

左より青木さん、梅本さん、梶川さん、日下部さん、玉越さん

特別な盛り上がりがあり、成功裏に終えたのは、大変嬉しく思います――日下部

日下部　今回は震災の影響もあり、一時は開催も危ぶまれた第七回「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」でしたが、無事終了することができ、本当に良かったと思っております。震災に関して大変なことも多かったと思われますが、今回のご感想をはじめ、今後さらに良いものとして育てていくための改良点などについて話していきたいと思います。まずは、今回、出場された梶川さんいかがですか?

梶川　ずっと受けてみたいと思っていたコンクールだったので、参加できて感激でした。

日下部　実際に舞台に立たれてみて、どうですか?

梶川　ホールが素晴らしく緊張したのですが、スタッフの皆さんがあたたかくて、伸び伸びと演奏させて頂きました。

日下部　次に弦楽専門誌「ストリング」の編集長である青木さんはいかがでしょう?

青木　今回は、震災直後という大変な時期でしたが、無事に終わったことを非常に喜んでおります。

日下部　それからフェスタ部門の副審査員長を務めておられる梅本先生は?

梅本　皆さまのおかげで無事開催できたことは、とても感慨深いです。感謝と共に、いつもとはまた違う特別な思いを感じましたね。

梅本さん

日下部　運営を担当した玉越さんは?

玉越　今回は震災の影響で、準備が本当に大変でした。四苦八苦しながらも、なんとか開催できたことに感謝しています。

日下部　震災でキャンセルした海外のグループも多かったですね。

玉越　三分の一がキャンセルだったのですが、最終的に三十二グループで開催することにしました。

玉越さん

日下部　本当に心配しましたが、よくやれたと思います。参加した海外のグループがチャリティーコンサートまでして下さいました。おかげで、特別な盛り上がりがあったと思います。非常に成功裏に終えたというのは大変嬉しく思いますね。梶川さんは、このコンクール&フェスタを最初から知っていましたか?

梶川　はい。前々回のコンクールの時、フルート四重奏の部門があるとお聞きしていたので以前から知っていました。

日下部　そうなんですか。今回、他のグループの演奏は聴かれましたか?

梶川　もちろん、演奏している時間以外はずっと客席に座って聴いていました。海外の方は、音楽的な作りや、プレゼンテーションの仕方が、生き生きしているので、すごく参考になりましたね。私はフランス留学時、各楽器の国際コンクールをよく聴きましたが、それに劣らず、みなさん技術もありますし、とてもレベルが高いコンクールだと驚きました。

日下部　青木さんはお仕事柄、多種のコンクールをごらんになっていると思いますが、いかがですか?

日下部さん

青木　全体的に非常にレベルが高かったと思います。最近、"ハーモニー"の美しいクァルテットが増えていますが、アタッカ・クァルテットは、とてもバランスよく上手に演奏していました。彼等が優勝したのは、"対話"や"和声"のバランスの良さが、要因だと思いますね。

青木さん

やはり"対話"だと思うが、"戦う"要素も必要だと考えています――梶川

日下部　最近は、"対話"を越して"戦う"ようなグループも出てきていますし、それも、ある種の曲には面白いと思います。もちろん、ハーモニーは大事にしなくてはいけないけれど。そのあたりのバランスは、全体を見ていかがでしたか?

青木　ウェールズ弦楽四重奏団は、かつてないほどの素晴らしいハーモニーの世界を実現していたと思います。ただ、まだあまり認識されておらず、今回初めて彼等の演奏を聴いて「こうした演奏もあるんだ」と認識された方も多かったのではないでしょうか。彼等には今の演奏をどんどん追求していってもらいたいと思いますね。

日下部　梶川さんは演奏者の立場から見て、どう感じました?

梶川　私はアタッカ・クァルテットを聴いて、戦う要素の強いクァルテットだったと思いました。二位のシューマン・クァルテットは、やわらかく情緒ある演奏をされていましたね。ドイツの方は音楽的なフレーズ感がとても充実していて、技術的にもマッチし、音程も素晴らしく迫力もあったと思います。

梶川さん

日下部　国民性というのもあるでしょうね。やはり日本人のグループは、"和"なのでしょう。ただ、全体的に"戦う"要素が強くなってきたように思いますが…。

梶川　そうですね。やはり"対話"だと思うので、私は"戦う"要

【玉越　邦彦】
1972年、住友生命保険相互会社入社。
1997年、日本室内楽振興財団に出向。
第3回～7回大阪国際室内楽コンクール&フェスタのプロデュサー。

【青木　日出男】
1979年神奈川大学外国部学部英語英文学科卒業。1980年レッスンの友社入社。1994年月刊ストリング（1986年創刊）編集長に就任。現在に至る。ストリングは、弦楽器を中心として、初心者からプロまですべての演奏家、愛好家を対象として編集している。若手の演奏家から世界的巨匠まで、これまで1000人以上にインタビュー。自身、学生時代からトランペットを演奏し、現在はアマチュア・オーケストラで活動している。

【梶川　真歩】
東京藝術大学、パリ国立地方音楽院、パリ・エコールノルマル音楽院を卒業。第3回コンクール・ジュヌフルーティスト（フランス）フルート部門第1位など多数の受賞歴がある。2008年、2009年小澤征爾音楽塾に参加。2009年サイトウ・キネン・フェスティバル武満メモリアルコンサートに出演。2011年サイトウ・キネン・オーケストラに参加。第7回「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」第2部門にアンサンブル・ミクストとして出場、3位入賞。

PROFILE
敬称略

【日下部　吉彦】（司会）
1952年、同志社大学英文科卒業、同年朝日新聞社入社。
1958年、朝日放送に転じ、音楽番組プロデューサー、解説委員を経て、解説委員室長を歴任。現在音楽評論界の第一線で活躍中。大阪音楽大学客員教授。大阪国際室内楽コンクール&フェスタの審議委員長、フェスタ審査員長。

【梅本　俊和】
大阪音楽大学ピアノ科卒業。1967、1977年に大阪文化祭賞受賞。1975年、大阪文化祭奨励賞受賞。日本ピアノ教育連盟等、様々な委員会において、委員長、副委員長を勤める。現在、大阪音楽大学名誉教授。CD「ソナチネ・アルバム」他をリリース。大阪国際室内楽コンクール&フェスタの審議委員、コンクール審査委員、フェスタ副審査員長。

素に否定的ではないですし、各楽器同士がぶつけ合うような演奏は大好きです。そのバランスが、全ての平均点を上げるように思うのですが…。

日下部　なるほど。どう戦い、どうハーモニーを作るかということがレベルを上げるということですね。

梶川　今回、このコンクールを見て、「戦うまでいかなくても、お互いが仕掛け合うような音楽をやりたいね」と、メンバーで話しました。

時代の音律を重視しながら、純正律などを考えている団体は美しかった――――青木

梅本　第一部門で本選に残った四組の団体というのは、どれが一位に入ってもおかしくなかったし、特にウェールズ弦楽四重奏団に関しては、日本人の弦楽四重奏団として、初めて一位を取るのではないかと思いました。ハーモニーが素晴らしく、互いのアンサンブル力をとても良く表現していて、それがかなりハイレベルだったと思います。ただ、本選を聞いた時にアタッカ・クァルテットのベートーヴェンには強い説得力があった。基本的な戦う姿勢とのバランスを取りながら、ベートーヴェンを聞かせてくれたという感じです。

日下部　全体的なレベルが上がり、ただ譜面どおりにする段階ではなくなったようですね。これからは、そこからどうするかという意識の有無で、かなり違ってくるように思います。青木さんの場合、取材で海外にも行かれると思うのですが、アンサンブル重視か対話重視か、個性かハーモニーかということに関して、世界的な傾向はどうだと思われますか？

青木　どちらかというと、アメリカは対話重視のアンサンブルが多く、ヨーロッパは調和を重視する傾向があるように私は思いますが、これからは、バランスが大切なのではないかと思います。

梅本　今回、今までの弦楽四重奏の演奏と色合いが違うと感じたのは、みんな個性を出して丁々発止とやり合いながら、そこにアンサンブルの個をみつけ出そうとしていること。あれは、場合によっては分裂状態に聞こえて、音が一つに聞こえてこない。今回、そういうグループが多かったように思います。

青木　平均律重視でやってきたグループがハイドンやモーツァルトをやるとおかしなことになると思います。やはり、あの時代の音律というものを重視し、

純正律などをちゃんと考えていたグループは美しかった。これが近代になると、平均律的に弾くほうがいいということがありうるわけで、そうした使い分けができないと厳しいですね。ウェールズ弦楽四重奏団は、一つの音に四つの音程を持っているそうです。それくらい使い分けるつもりで、ちょうどいいのかもしれない。

梅本　それは例えば、純正律と平均律との違いとも言える。純正律で演奏した場合の音程と、平均律の音程で演奏した場合とでは、ハーモニーが全然違います。

青木　もうひとつ、ピタゴラス音律も大切ですね。そのあたりを考えている団体は、これからも伸びていくと思います。

梶川　そうですね。オーケストラでは、管楽器はエフドゥア（F dur へ長調）のラの音は五度なので低めで合わせないと必ず合いませんし、ドだったら五度目なので少し高めに幅を取るとか。そうしないと音程が合わないので、かなりシビアに考えています。

日下部　曲によって変えるというのは、かなり難しい話ですね。

梶川　例えば、三度をハモる相手がオーボエで、その部分の下

のベースが何の音だというのは分析していかないと音程が作れないので、かなり楽曲分析のようなことはしました。やはり、曲によって音程を考えていくというのは必須条件ですね。

もっと日常的に室内楽を楽しんで頂きたい――――玉越

日下部　梶川さんのグループは常設ですか？

梶川　私がパリにいた時は帰国する度ごとに集まり、オーボエ奏者が今はドイツに行っているので、彼が帰国する度に集合という感じなので、年に一度集まるという感じです。

演奏中の梶川さん

日下部　今の日本では、そうしたケースが多く、常設する程の需要がないように感じますが、青木さんはどう考えますか？

青木　確かにそうだと思います。日本にはたくさんのホールができてきているのに、それに見合った団体の数は少ない。もう少しホールも積極的にやって頂けたらと思いますね。

日下部　今回も会期中に、アウトリーチとして学校で演奏したりしていましたが、そうしたことを恒常的にできないのでしょうか？あるいは、もっと室内楽の楽しさを知らせるための企画を考えて、室内楽をしている人が携われるような場を作るとか…。

玉越　そうですね。もっと日常的に室内楽を楽しんで頂きたいですね。

ロシアの楽器を使って、イタリアをテーマにしたグループには、とても感心しました――――日下部

日下部　他に改善すべき点などはありますか？

青木　フェスタは、前半の演奏を忘れてしまう傾向があるのか、後半の出場者が入賞しやすいように思うのですがいかがでしょう。例えば、本選の前半に二組デュオがありましたね。連弾のゾフォ・デュエットとサックスのデュオ・カリプソ。カリプソはソプラノサックスから、アルトサックスとテナーサックスを使い分けていて、非常に印象深かったのですが、結局後半の演奏まで聴いているうちに、その印象が薄くなってしまった気がしたんです。

梅本　確かに銅賞以上の団体は最後の三組ですね。

玉越　私共もそうした傾向を感じていて、問題意識があります。

梅本　今回だけじゃなく、前回もそういう傾向でした。ですから、フェスタ全体がそうした傾向にあるのかもしれない。ただ、外から演奏順に囚われるようにみえてしまうというのは、考えなくてはいけないと思います。

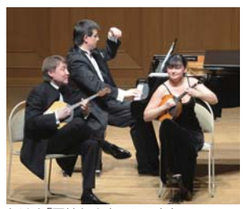
日下部　出演する側として、梶川さんは順番を気にしますか？

梶川　そうですね。私もたくさんコンクールを見ているのですが、最初の方はどうしても印象に残りにくいように感じます。

梅本　プロの審査委員は問題ないと思うのですが、一般審査員となると、どうしても最後の方が強く印象に残るという傾向はあるでしょうね。

玉越　今回もロシアの楽器ドムラを使っている団体が優勝。一般審査員の場合、若干そうした好みも反映するように思います。

日下部　ドムラの場合、前回のグランプリの印象も強いかもしれないけど、他にもロシアの民族楽器を使ったグループはたくさんエントリーしていたし、単に客観条件が重なったというのもあるのではないかな。また、ドムラを使ったグループがロシアの民族音楽だけでなく、イタリアをテーマにした曲を弾きましたよね。これは考えたなぁと感心しました。



トリオ「国境なきクラシック」

梅本　編曲もなかなか上手だったし、ちゃんと楽しませることを知っていましたね。

日下部　だから、ドムラだから優勝したと言うのではなく、やはり力があるのですよ。

身体の動きで音楽を表現するというのは、非常に理にかなっています――梅本

モーフィン・クァルテット

梅本　第二部門で優勝したモーフィン・クァルテットも上手かったですね。クァルテットとしてのアンサンブル力、個人の演奏力、サックスを使ってあれだけの演奏をできると言うのは素晴らしい。パフォーマンスも含めて、ダントツに上手かったと思います。

梶川　私はモーフィン・クァルテットのマティユさんに話を聞いたのですが、日本に来る前に同じプログラムで五回コンサートをし、衣装や立ち振る舞い等、先生にいろいろなアドバイスを頂きながら、かなり準備に時間をかけたそうです。

梅本　あれは印象的でした。最後の音がピアニッシモで長く続いて終わったとたん息切れして、四人とも後ろにダダダダーッと倒れた。みんな死んじゃったかと思ったくらいですよ（笑）。そういうパフォーマンスを嫌う人もいるかと思いますが、見ていて楽しかったですね。

玉越　勇気ありますね。コンクールの場でやるというのは。

日下部　今、パフォーマンスの話が出ましたが、これも最近の傾向ですね。これについてはどうお考えですか？

青木　実力に自信のあるところは、やってもいいと思います。

玉越　フェスタのカリヨンもやっていたでしょ。暗譜であれだけ動きながら正確にやるというのは、本当にうまいと思いました。

日下部　暗譜は、かなり難しいことですよね？

梶川　そうですね。彼等とも仲が良いので、どのようにして暗譜するのか聞いたのですが、動きをつけながらいろいろ決めていくので、自然にできていくし、暗譜することで、音を空気で感じられると言っていました。

カリヨン

青木　私もあれには感動しました。音楽の構造を視覚的にわからせてくれたことがとても素晴らしい。

梅本　全然違和感がなかったですね。演奏力の高さも大きいと思います。

日下部　声楽の人は暗譜しますが、器楽の人は大体暗譜が苦手ですよね。それがこのコンクールでは、結構暗譜する人が出てきた。これはこのコンクールの一つの功績だと思います。音楽は音を出すというだけでなく、演技力によって音を表現するという、別の分野が誕生しつつあるように思いますね。

梅本　身体の動きで音楽を表現するというのは、非常に理にかなっていますよね。音に説得力が出てくると思います。

青木　カリヨンを見た時に、とても納得させられましたね。

日下部　やはり、なにかのきっかけがいるのだと思いますよ。例えば、こういう場で見ると「今度は私達もやってみよう」となる。最初にするのは冒険的だし、二の足を踏みますよ。特に日本人は新しいことを始めるのが苦手ですから。まず、外国の人が新しいことをしたのを見て、真似してやってみようとなる。日本人は真似するのは上手い（笑）。そうしたことに関して、日本人は独特の才能があると思います。取り入れて、しかもそれ以上にするというのは得意ですからね。だから、そういう意味では、この「コンクール&フェスタ」が非常に良いチャンスになると思いますよ。

「コンクール&フェスタ」は、まさに格好の教科書だと思いますね――青木

玉越　フェスタは年齢制限がないので、再応募が多いですね。面白い演奏を見て自分達もやってみて再応募したり、一度出演した後で再度作戦を考え直して再挑戦するというケースもあると思います。そういう意味で、フェスタは広がってきているように思いますね。

日下部　重要なきっかけをつくるという意味で、かなり大きな功績だと思います。一方、第一部門の弦楽四重奏は、室内楽の原点だから変えちゃいけないという意識があるのか、変化が少ないように思うのですが…。

梅本　そうですね、一番変わりにくいのでしょうね。

青木　変えるとしたら、並び方や姿勢でしょうか。例えば、立って演奏するとか。

玉越　前回、立って演奏して二位になったセシリア弦楽四重奏団がいましたね。

日下部　そうした二種のチャレンジが、もう少し第一部門にも出てくると面白いと思います。

梅本　そういう意味では今年のアタッカ・クァルテットはチャレンジ精神がありましたね。

アタッカ・クァルテット

玉越　予選の時、古典と新しい曲目に二種類の弓を持っていて持ち変えたと聞きました。

日下部　そうしたチャレンジ精神が、これから生まれていくのはとてもいいですね。その他、気づかれた点はありますか？

梅本　今回、七回の積み重ねが大きく出たと思います。予選から多くの聴衆が来て楽しんで下さった。これはなによりだと思いますね。

日下部　私の友人も日本一安いコンサートだと楽しんでいます（笑）。とても安い入場料でレベルの高い演奏が見られる。もっと告知して知ってもらえるといいですね。演奏者にしてもお客様は多い方がいいですよね？

梶川　はい。張り合いになりますし、やりがいがあります。

梅本　そうでしょうね。空気の流れが違いますでしょう。

日下部　舞台と客席との空気の交流があるから、演奏はヒートアップするわけで、それがないと音楽が生きてこないと思いますね。たくさんの聴衆に来ていただくためには、アウトリーチが大切だと思います。例えば、参加団体が街角や学校などで演奏して聴かせてあげるというような方法もひとつですよね。そうした演出がこの「コンクール&フェスタ」のPRになりますからね。青木さんはこのことに関してどう思われますか？

青木　そうですね。アウトリーチも重要だと思います。また、日本の吹奏楽人口というのは多いですし、特に関西は盛んで優秀な団体が多い。そのあたりをもっとPRされるといいのではないでしょうか。まさに格好の教科書だと思いますからね。

震災で参加団体が減っても影響はなく、ハイレベルだったと思います――梅本

日下部　アンサンブル・コンテストというのは、まさにこれがお手本だと思います。今後はアウトリーチも頭において告知して頂ければと思います。他にご意見はないでしょうか？

梅本　冒頭、震災のことがありましたが、キャンセルがあったにしても、この時期に来日してくれたグループがたくさんいたことは、本当に喜ばしいことだと思い、深く感謝します。

玉越　チャリティーコンサートも七組が名乗りを上げてくれて、とても有難かったですね。

梅本　そしてその結果、決して見劣りのするものではなかったのだから、素晴らしいと思います。レベル的にも高く、参加団体が減ってもなんら影響はなかったということですね。

日下部　今回、「コンクール&フェスタ」が、日本を代表するものとなっていくと確信しました。本当に皆さんのおかげだと思います。今後ともさらに大きく発展することを願いながら、これからも貢献していきたいと思います。皆さん、貴重なお話を有難うございました。

7th コンクール&フェスタ フォトメモリー

Start

Newsletter

The Press Conference on the 7th Osaka International Chamber Music Competition & Festa

On 28th March the Japan Chamber Music Foundation has held a press conference on the 7th Osaka International Chamber Music Competition & Festa at the Hotel New Otani (which is the accommodation for the Jury members). The purpose of the press conference was to announce the holding of the 7th Osaka International Chamber Music Competition & Festa in May and its participating ensembles.

Press Conference on the Competition & Festa

Mr. Yoshihisa Akiyama

At the beginning of the press conference, Mr. Yoshihisa Akiyama, the President of the 7th Osaka International Chamber Music Competition & Festa, said, "As you know, the earthquake and tsunami on 11th of this month claimed a heavy toll of lives and of more than twenty thousand houses washed away or destroyed. However, as the western side of Japan, where Osaka is located, has not been affected by the disaster or the radiation leakage, we have decided to hold the Competition and Festa as planned. Seeing the musical backgrounds of the participating ensembles, we have learnt that they possess great careers, or their music level probably is the highest in the history of the Competition & Festa. It is our sincere hope that the success of this event will console people and will be a milestone to start the restoration of Japan."

3月末に「必ず開催する」旨、世界各国に発信した文書

アーチ看板も掲示されOBP周辺はコンクールの雰囲気に

世界の一流音楽家も審査委員として来日（大阪市公館での歓迎パーティー）

参加者第１弾来日（ホテルグランヴィア大阪）

翌日の１次予選を前に真剣に練習する参加者

いよいよコンクールスタート
（第１部門１次予選）

第１部門：ノガ・クァルテット（奨励賞受賞）

第２部門：メリスマ・サクソフォン四重奏団（奨励賞受賞）

フェスタ：ヴァイヴォラ（フォークロア特別賞受賞）

優勝決定の瞬間（アタッカ・クァルテット）

盛大に行われた表彰式（いずみホール）

土井理事長から表彰状を手渡されるモーフィン・クァルテット

Finale

東日本大震災支援の義援金を振込み、完了

急遽開催したチャリティー・コンサート（大阪・淀屋橋）

披露パーティーでの喜びの弁（トリオ「国境なきクラシック」）

各部門の優勝団体を一堂に会しての記者会見（ホテルニューオータニ大阪）

グランプリ受賞団体

第1部門（弦楽四重奏）

1位 アタッカ・クァルテット（アメリカ）
Attacca Quartet (USA)

エイミー・シュローダー…… 第1ヴァイオリン
徳永　慶子…… 第2ヴァイオリン
ルーク・フレミング…… ヴィオラ
アンドリュー・イー…… チェロ

2003年ジュリアード音楽院で結成し、2006年第60回コールマン室内楽コンクールでアリス・コールマン・グランド・プライズを獲得したアタッカ・クァルテットは、国際的に高く評価されており、アメリカで一流の若手アンサンブルの一つに数えられている。同クァルテットは、2007年カーネギーホールでのデビュー以来、同ホールで何度もコンサートを開催している。ボストン大学タングルウッド・インスティテュートのレジデント・アーティストを経て、現在2010から2011年のノーザンライツ音楽祭のレジデント・クァルテットを務めている。

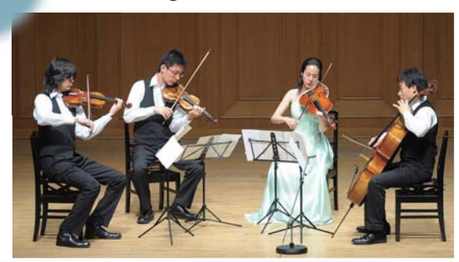
Message 今回の受賞は、「うれしい！」の一言に尽きます。以前からこのコンクールを受けたいと思っていて、1年ほど前から毎日3〜4時間音合わせをして準備してきました。他の方々の演奏が非常にハイレベルだったので、とてもひやひやしました。11月に国内ツアーで来日します。演奏とともにトークを交えながら、幅広い方々にクラシック音楽を楽しんでいけるようなアンサンブルを目指していきたいですね。

2位 シューマン・クァルテット（ドイツ）
Schumann Quartett (Germany)

エリック・シューマン…… 第1ヴァイオリン
ケン・シューマン…… 第2ヴァイオリン
後藤　彩子……ヴィオラ
マーク・シューマン……チェロ

シューマン・クァルテットは2007年に結成され、ケルビーニ四重奏団やアルバン・ベルク四重奏団に師事。2009/10年からはデュッセルドルフのロベルト・シューマン・ホールの「アーティスト・イン・レジデンス」となり、ドイツ各地で定期的に演奏を行っている。また、「ドルケン基金」奨学金を獲得。2011/12年には「ベスト・オブNRW」で演奏することになっており、その模様は西部ドイツ放送協会から、ドイツ全土に放送される予定。

3位 ウェールズ弦楽四重奏団（日本〈スイス在住〉）
Verus String Quartet (Japan 〈Swiss-based〉)



﨑谷　直人…… 第1ヴァイオリン
三原　久遠…… 第2ヴァイオリン
原　　裕子……ヴィオラ
富岡　廉太郎…… チェロ

2006年結成。軽井沢八月祭、宮崎音楽祭、ドイツ、スイスでの現代音楽シリーズなどに出演。2008年、ミュンヘン国際コンクール3位。2009年王子ホールにてデビュー。2010年度京都青山バロックザール賞受賞。これまでに、原田幸一郎氏、東京クワルテットに師事。2010年よりバーゼル音楽院に在籍し、ライナー・シュミット氏に師事している。今年12月に、八王寺音楽祭に出演の予定。

第2部門（管楽アンサンブル）

1位 モーフィン・クァルテット（フランス）
Morphing Quartet (France)

クリストフ・グレズ…… ソプラノ・サクソフォン
マーテ・トリヨ…… アルト・サクソフォン
エディ・ロペズ…… テナー・サクソフォン
マティオ・ドラズ…… バリトン・サクソフォン

モーフィン・クァルテットはパリ国立高等音楽院でクロード・ドゥラングル教授のサクソフォンの授業を受けていた学生により結成。メンバーは、音楽に対する共通の思いから、フランスの国内外で開催される多くのフェスティバルに出演している。2010年にはパリ国立高等音楽院の室内楽コースに入学。現在はデイヴィッド・ウォルター教授やミシェル・モラゲス教授の下で研鑽を積んでいる。彼らはサクソフォン四重奏のレパートリーを増やすため、新曲にも熱心に取り組み、現代作曲家とのコラボレーションも行っている。

Message 優勝できて本当にうれしいです。このコンクールでとても良い経験をしました。メンバーは全員パリ音楽院で学んだ仲間です。第5回コンクールで先輩のハバネラ・サクソフォン・クァルテットが優勝したことを聞いていたので、是非やってみようと思っていました。

2位 イン・メディアス金管五重奏団（ハンガリー）
In Medias Brass Quintet (Hungary)

リチャード・クレス……トランペット
アンタル・エンドレ・ナジ…… トランペット
ヤーノシュ・ベニュシュ…… ホルン
ローベルト・シュトゥルツェンバウム…… トロンボーン
ヨージェフ・バジンカ・ジュニア…… チューバ

イン・メディアス金管五重奏団は、ブダペストのフランツ・リスト・アカデミーの元学生によって2010年1月に結成。同年8月、韓国で行われた第6回済州島国際金管楽コンクールでは、ホルン・トロンボーン・チューバ・金管五重奏など、参加した全部門で入賞を果たした。2010年11月にドイツで開催された第11回パッサウ国際管楽コンクールで優勝。

3位 アンサンブル・ミクスト（日本）
Ensemble mixt (Japan)

梶川　真歩…… フルート
本多　啓佑…… オーボエ
尾上　昌弘…… クラリネット
嵯峨　郁恵…… ホルン
中田　小弥香…… ファゴット

2003年、東京藝術大学内にて結成。2005年、2006年、学内にてコンサートを開催し、好評を博す。その他学内外の多数のコンサートに出演。これまでに室内楽を小林裕、守山光三各氏に師事。ベルリン木管五重奏団のマスタークラスを受講。今年12月には、津田ホールにてプロとしてのデビュー・コンサートを開催の予定。

フェスタ部門

メニューイン金賞

トリオ「国境なきクラシック」(ロシア)

Trio "CLASSIC WITHOUT BORDERS" (Russia)

ドミトゥリ・クリヴォノソヴ…… ピアノ
ミハイル・サヴチェンコ…… ドムラ
アリョナ・サヴチェンコ…… ドムラ

トリオ「国境なきクラシック」は2006年にロストフ・ナ・ドヌで結成。メンバーは全員ロストフ州立ラフマニノフ音楽院を卒業しており、その最初の本格的な活動は、音楽院の大コンサートホール建設のためのチャリティーコンサートであった。バッハ、メンデルスゾーン、チャイコフスキー、シュニトケといった管弦楽作品を自らの手で編曲し、それをレパートリーとしている。また同時に、現代の作曲家とも協力している。ロシアのみならずヨーロッパの国々でも活躍している。

Message すばらしい賞をいただくことができて最高です！　日本では3月に未曾有の大震災が起きましたが、そういった中でこのようにコンクール&フェスタを開催できたこと、そしてここに参加できたことを心からうれしく思います。今回の曲目は、このフェスタのためにプログラミングしました。半年前から週に2回集まって練習し、ひとりでも毎日8時間練習しました。2013年にはグランプリ・コンサートで来日しますので、新しいプログラムで皆さんにお会いできるのを楽しみにしています。

銀賞

ネポムク・クィンテット(チェコ)

Nepomuk Quintet (Czech Republic)

クリスティアン・ポウル…… ピアノ
白井　圭…… ヴァイオリン
マグダレナ・エーバ…… ヴァイオリン
ジャン・リスカ…… チェロ
ペトル・ポペルカ…… コントラバス

ネポムク・クィンテットは、急激に進化を遂げているピアノ五重奏団である。才能ある若手音楽家で結成されたこの団体は、メンバーがそれぞれプロとして活躍する傍ら室内楽に献身し、情熱を傾けている。聴衆と素晴らしい音楽を共有したいという思いから、スタンダードな曲に加え、自らアレンジを手掛けたクラシック曲も演奏している。

銅賞

カリヨン(デンマーク)

Carion (Denmark)

エレン・ナヴァス…… フルート
アジールス・ウパトニオクズ…… オーボエ
アジールス・シェーファース…… クラリネット
デイヴィッド・パルムクウィスト…… ホルン
ニールス・ラーセン…… ファゴット

カリヨンは独特で魅力ある演奏スタイルを持つ木管五重奏団である。全曲暗譜で演奏することにより動きが自由になり、観客とのコミュニケーションが密になり、作品に相応しい振付も可能となった。2002年に結成されたこのアンサンブルは、様々な国際音楽祭での演奏活動で高く評価されている。2006年マルコ・フィオリンド国際室内楽コンクールで入賞を果たしている。

大阪の楽団探訪

大阪交響楽団

大阪交響楽団　©飯島 隆

「聴くものも、演奏するものも満足できる音楽を！」

一九八〇年(昭和五十五年)九月、大阪フィルハーモニー交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団に次いで三番目に誕生したのが「大阪シンフォニカー」(当時)です。

ごく一般のクラシック音楽好きの主婦が、音楽大学を出てもその才能を生かす場の少ない若者に演奏の場を与えたいとの思いで知り合いの筋を頼ってプロのオーケストラの設立に漕ぎ着けました。その主婦こそ、現楽団代表敷島博子氏です。

冒頭のモットーは敷島代表の熱情の凝集であり、その精神を受け継いだ演奏はときに「魂の叫び」「情熱の音」などと評されています。一方、楽団運営に関して待遇問題、演奏日程、練習場所などなど現実的な課題が重くのしかかっていることも事実です。楽団の揺籃期から今日まで、現場のすべてに通じた若き事務局長・赤穂正秀氏にお話を伺いました。

◆多彩な指揮者陣

一九八〇年(昭和五十五年)九月の設立を前に、八月にはオーディションでメンバー五〇名を選考し、初代常任指揮者には小泉ひろし氏が就任した。設立後初の演奏は同年十二月の福島県会津若松市での「第九」であった。

翌一九八一(昭和五十六年)年三月には第一回の定期演奏会を森ノ宮ピロティホールで開催したのを皮切りに、一九八九年(平成元年)まで毎年二回、一九九〇年(平成二年)から一九九三年(平成五年)までは年三回のペースで定期演奏会を開催してきた。今では年間十回の定期演奏会を開催し、九月末には二五九回目、年度末の来年三月には二六四回を数えることになる。この定期演奏会以外にも各地で多くの演奏会を開催し、現在では年間の公演回数は一〇〇回を超えている。実に精力的でタイトな活動日程に眼を見張ってしまう。

この間、初代常任指揮者の小泉ひろし氏以降、牧村邦彦氏、トーマス・ザンデルリンク氏、本名徹次氏、曽我大介氏、寺岡清高氏、大山平一郎氏、ウラディミール・ヴァーレック氏が指揮者陣に就任している。とりわけ、このトーマス・ザンデルリンク氏は一九八九年の第二十回記念定期演奏会で客演指揮者を努めた。このことが当時の楽団ではまだまだ希薄でしかなかったプロフェッショナルな音楽家としての意識を目覚めさせたといわれている。

二〇〇八年四月には永年ドイツ歌劇場で活躍してきた児玉宏氏が音楽監督・首席指揮者に、二〇〇九年四月にはキンボー・イシイ=エトウ氏が首席客演指揮者に就任、二〇二年四月には寺岡清高氏が、それまでの正指揮者から常任指揮者に就任して、今日の指揮者陣を構成している。とりわけ、児玉宏氏の就任は楽団経営、楽団員のモラールの向上など多くの面で画期的な波及効果をもたらしている。

◆飛躍に向けた変化の数々

楽団は一九九七年(平成九年)四月に、社団法人日本オーケストラ連盟への加入が認められ、プロのオーケストラとしての確固たる地位を築いた。

翌一九八六年(昭和六十三年)には楽団の支援組織である大阪シンフォニカー協会が設立された。二〇〇〇年(平成十二年)五月には協会事務局を堺市に移した。堺市は大阪市に次ぐ府下第二の政令都市であり、ここを本拠に堺市の文化の顔として、その活躍振りに注がれる熱い視線と期待感はとても大きい。

二〇〇一年(平成十三年)には楽団名を「大阪シンフォニカー」から「大阪シンフォニカー交響楽団」に改称。同年七月には敷島鐵雄氏が楽団長に就任した。そして二〇〇六年(平成十八年)四月、大和ハウス工業株式会社代表取締役会長兼CEOの樋口武男氏が理事長に就任し、現在に至っている。就任に際して樋口理事長は「大阪・関西の文化振興を考える上で、地域に密着したオーケストラの存在は不可欠である。」との認識を表明されている。

二〇一〇年(平成二十二年)四月一日、創立三十周年を迎えるのを機に楽団名を現在の「大阪交響楽団」に改称し、活動の場を更に大きく広げていくための地道な活動の日々が続いている。

二〇〇〇年以降は楽団名の変更、理事長の交代、事務局の移転など激しい変化の波は続いた。この流れの中でも国や大阪府ほか公共団体からの各種顕彰を幾度も受け、海外公演も行い、極めて積極的な活動姿勢に翳りは見られない。

◆新しいシリーズの企画の充実に向けて

ただ、これらの華やかな表舞台とは別に、楽団の台所事情は火の車である。年間の演奏回数は一〇〇公演前後、現在の楽団員数五〇名では、二〇公演をこなさなければ運営は厳しくなる。しかし、一〇〇公演を超すと団員の心身の負担が大きくなる。秋のシーズンともなると、大阪を離れて二・三週間に亘る地方公演も珍しくない。昨今の「事業仕分け」も楽団の経営に大きく影響する。公的助成金を原資とした演奏会や補助が多いためだ。

そんな厳しい環境下でも、児玉宏音楽監督のリーダーシップのもとで進めている“ディスカヴァリー・クラシックシリーズ”は各方面で極めて高い評価を得て、「関西四楽団で最も気を吐いている」との声も聞こえてくる。「全国から大阪に来て、大阪交響楽団でしか聴けない特徴あるプログラミングを堪能してほしい。」と赤穂事務局長が熱く語る。

音楽雑感

ハイドンのユダヤ

大阪大学大学院文学研究科教授　伊東　信宏

【伊東信宏（いとう　のぶひろ）・プロフィール】
一九八〇年京都市生まれ。大阪大学文学部卒業、同大学院修了（文学博士）。リスト音楽院（ハンガリー）などに留学。大阪教育大学、大阪大学准教授などを経て、現職。著書「バルトーク」（中公新書、一九九七年）で吉田秀和賞、「中東欧音楽の回路」（岩波書店、二〇〇九年）でサントリー学芸賞を受賞。また朝日新聞、NHK・FMで演奏会評・解説を担当している。

洋書を扱う店で『ハイドンのユダヤ』*Haydn's Jew*という書名を見て、思わず買ってしばらく目につくところに置いておいた。「思わず」買った、というのは、この書名がどう見ても自分のためにあるような気がしたからだ。筆者は八年ほど前に『ハイドンのエステルハージ・ソナタを読む』という本を書き、二年前に『中東欧音楽の回路：クレズマー・ロマ・二十世紀の前衛』を出した。「クレズマー」というのは、ユダヤの大衆音楽家のことだから、ハイドンとユダヤの両方について、別々に本を書いていたわけだが、実はこの両者の間にどういう関連があるのか、自分でも謎だったのである。ハイドンの本を準備していた十年ほど前、昼間は授業でハイドンのクラヴィーア・ソナタを分析し、夜はそのままロマやクレズマーの音楽を聴きに出かけ、しかもこの二種類の音楽以外（仕事でどうしても聴かねばならないもの以外）の音楽には、ほとんど食指が動かない、という時期があって、これが自分でもちょっと妙だな、と思っていた。どうしてハイドンと、ロマやクレズマーといった村の楽師の音楽だけなのか。これは考えてみればかなり対照的な取り合わせである。ハイドンの音楽が、クラシックの中でもちょっと渋目で上品なものである一方、村の楽師の音楽というのはヨーロッパの音楽のなかでも一番通俗的で猥雑なものだとすると、この二つはいわば両極端とも言える。筆者は、中庸、中道的なものより極端なものを好きになる傾向がある、と自覚しているので、まあこの両極端に引き寄せられるというのもわからなくはないのだが、それでもどうして「ハイドン」と「楽師」なのか、どうして例えば「フォーレ」と「キャバレーの音楽」ではないのか、ということはよくわからなかった。実際、人にきかれて答えに窮する、ということもなくはなかったのである。

そんなわけで、この『ハイドンのユダヤ』という書名に引き寄せられたのだが、買ってから一年ほどしてようやく読んでみて色々発見があった。キャリル・クラークという女性の著書だ。

まず第一に、ハイドンとユダヤ人たちとの関係について。ハイドンが人生のかなりの部分を過ごしたエステルハージ家の居城があるのはアイゼンシュタットという街だが、この街にはかなり大きなゲットーがあったらしい。このこと自体は、日本語文献でもすでに言及されている。たとえば加賀美雅弘さんの『ハプスブルク帝国を旅する』という新書（講談社新書、一九九七年、これは旧ハプスブルク帝国時代の旅行案内を見ながら、現在のウィーン、ブダペスト、プラハ、ベオグラードなどハプスブルクの諸都市を回る、というなかなか趣のある本だ）には

ハイドンが仕えたエステルハージ家の
居城（アイゼンシュタット）の様子。筆者撮影。

そんなことが書いてあって、気になってはいたのだが、ハイドンという宮廷人と、ゲットーのユダヤ人たちとの間にどの程度交渉があったのか、というようなことは想像するしかなかった。クラークの著書では、彼らの間に「慈悲の兄弟」修道会の慈善事業というものを置いて、この関係が説明されている。ハイドンは、この修道会の委嘱を受けてミサ曲などを書いているし、一方でこの修道会の慈善事業の対象たる病人や貧しい人々のなかには、近隣のゲットーのユダヤ人たちが含まれていたのであり、こういう関係を通じて、ハイドンは自分たちの身の回りにいるユダヤ人の生活や習俗（あるいは音楽）にもふれあっていたはずだ、というのである。

また、ハイドンのオペラ『薬剤師』には、ハイドンによる「ユダヤ的」な人物描写が見られる、というのがクラークの主張である。『薬剤師』というのはゴルドーニの台本による一七六八年初演のオペラ。比較的初期の作品である。主人公は、薬剤師という自分の専門にもう一つ不熱心なくせに一攫千金には目のない薬屋である。彼は自分の弟子に薬の調合など任せっきりで、しかもその弟子に思いを寄せている若い女性を横取りしようとして、痛い目にあう。クラークによれば、この「薬剤師」の人物像は（それと明示していないものの）当時のユダヤ人の舞台的表象（つまり日本人といえば、黒縁眼鏡にカメラをさげて謎の笑いを浮かべている、といったステレオ・タイプの表象のユダヤ版）をなぞるものだった、という。

ハイドンがオペラを書いた頃の
ウィーンの薬屋。我々のイメージからすると、
薬局というよりハーブショップに近い。

たしかにこの人物はなかなか興味深い。冒頭、彼は商売そっちのけで、新聞の記事に読みふけって、その事件を周囲の者に読みきかせたりするのだが、これはつまり彼がある種の教養人であり、その教養を多少ともひけらかしたいタイプであることを示している。この冒頭の場面は、新聞報道の文章をテクストにして、オペラの音楽が進行する、というなかなかシュールなものとなっていて、ハイドンの進取の気性はこういうところにも見て取れるわけだが、同時にこれはハイドンとユダヤとの関係をも示している、というわけだ。

また当時、ハイドンの周りにいた芸人集団（ハイドンは若い頃はそういう旅回りの一座の一員として音楽修行を積んだし、またエステルハージ家に仕える身になってからも宮廷にはしばしばそういう一座が出入りしていたようだ）のメンバーだったユダヤ系の芸人、あるいはユダヤ人の真似を持ちネタとする芸人たちから、様々なことを学んでいた、とクラークは主張する。そういういくつかの経路を通じて、ハイドンの音楽にはユダヤ的な要素が紛れ込んでいるということになる。

ハイドンの音楽について、こういう研究が出てくる、というのはいかにも現代的な現象だ。かつてのように「大作曲家」による「傑作」の、その傑作たる所以を作品内在的に解き明かす、というような音楽の研究は今ではほとんど見られなくなってしまった。ハイドンのような大作曲家についても、もし何か書けるとすれば、それがどういう社会的連関の中で、どんな民族的、社会的、階級的、経済的意味を担っていたか、というような話になる。そういう類いの研究の中ではこの『ハイドンのユダヤ』は（多少無理しているところもあるように思うが）、面白いし、何より新鮮だ。少なくとも筆者にとっては、ハイドンの音楽と村の楽師達の音楽とを思いがけない角度で結びつけてくれるものだった。

優勝までの苦難の道～アマリリスQの場合

音楽ジャーナリスト
渡辺　和

二〇一一年の弦楽四重奏のコンクール・ラッシュは、五月の大阪、六月のイタリアのパオロ・ボルチアーニ国際弦楽四重奏コンクール、七月のメルボルン国際室内楽コンクールへと続いた。科目を交代し毎年秋に開催される北京国際音楽コンクールも、中国初の国際水準の室内楽コンクールとして弦楽四重奏を取り上げる。大阪を辞退したアマリリス弦楽四重奏団（以下Q）を例に、若い音楽家のコンクールとの関わり方を眺めてみよう。コンクール取材とは、ときに若者と苦しみを共にする体験でもある。

コンクール運というもの

アマリリスQという団体がある。二〇一二年現在でコンクールへの参加意欲がある若手で実力はトップクラスと業界関係者の誰もが知る名だ。アルバン・ベルクQを育てたラサールQの第一ヴァイオリン奏者ワルター・レヴィンが、最後に教えた団体のひとつ。アマデウスQを引き継いだ伝統あるケルン音楽大学のアルバン・ベルクQ教室でも学ぶとなれば、正に現代のドイツ語圏室内楽の正統派である。

二〇〇五年にオランダのチャールズ・ヘネンコンクールでの優勝を皮切りに、世界の主要弦楽四重奏コンクールに次々と参加。ベネヴィッツQとドーリックQの両大阪優勝団体が頂点で激突した前回二〇〇八年のボルチアーニ・コンクールの本選で弾き、実質四位の特別賞を獲得。この時点でヨーロッパ室内楽関係者がその力を認める有力団体と認識された。同年秋のミュンヘンはセミファイナル止まりだったものの、数ヶ月後にアイントホーフェンでの特別大会で優勝。ハンブルクで自主演奏会シリーズも開始する。

レッジョ・エミリアで力演するアマリリスQ。

筆者はこのオランダの大会は二次予選を一日眺めただけだが、アマリリスQが順調に勝ち進んだと後に知り大いに喜んだものだ。華やかさとは無縁の実力派なので、どんな国際大会であれ優勝の二文字さえあれば、世界を遍歴する徒弟時代に終止符を打つに充分だと思ったからである。

とはいえ、現実は甘くはなかった。地方のファンが運営するローカル音楽協会で演奏を積み重ね実力と知名度を上げていく旧来の室内楽キャリアが崩れつつあるヨーロッパでは、昨今、地方都市の音楽祭が室内楽の重要な市場となっている。演奏会の担い手が、自分の趣味や意見がはっきりした音楽愛好家から、日本の公共ホール同様に一般公務員へと移りつつある。結果として、著名国際コンクールのタイトルの価値が高くなっている。

そんな状況を受けてか、アマリリスQは二〇〇九年春のロンドン大会にも挑戦する。が、セミファイナル止まり（弦楽器専門雑誌「ストラッド」批評家タリー・ポッターは、アマリリスQを優勝団体よりも高く評価し、とりわけヴィオラ奏者を若手で最高と絶賛した）。翌年初夏のボルドー、続く秋のバンフ・コンクールでも、やはり本選に届かない。誰も実力を疑わないのに何故か付いて来ない結果に、本人らも焦りを感じ始めていた。結果発表後のバーカウンターで「もうコンクールはこれきり」と愚痴をこぼすメンバーを、「次の大阪においでよ」と何度慰めたことか。

幻の大阪と悲嘆のボルチアーニ

そして二〇一一年である。大阪大会に応募したアマリリスQは、過去最難関となったテープ審査を無事に通過、三月末の記者会見で発表される参加予定者リストに名を連ねる。その経歴と実力からすれば、優勝候補の筆頭格だ。ところが三月十一日大震災と福島原発事故がドイツで大きく報じられる。アマリリスQから事務局に寄せられた出場辞退の連絡は、日本の悲劇を前にした決断の苦しさがにじむ真摯な文章だったという。

この段階で史上空前の三大陸国際大会三連覇の夢は潰えたものの、既に参加が決まっていた翌六月のイタリアはレッジョ・エミリアで開催されるパオロ・ボルチアーニ・コンクールの重要さを考えれば、無茶はしたくない気持も理解出来る。なにしろこのコンクール、実利的なキャリアを考えれば、世界で最も優勝に意味がある大会。勝てばヨーロッパの室内楽マーケット動向を左右する有力マネージメント会社の下で世界ツアーが用意されるのである。ボルチアーニ優勝とは、世界一の弦楽四重奏マネージャーの下での一年間の試験採用に他ならない。実質的にはコンクールという名の国際公開オーディションだ。ボルチアーニ・コンクール事務局もそんな性格は心得ており、今回から大きな変更を行った。ファイナリストに順位は出さず、受賞はグランプリのみとしたのである。

元アルバン・ベルクQ第一ヴァイオリン奏者ピヒラーを審査委員長に迎えた大会の過程を記す余裕はない。二次予選終了段階でピヒラー門下の音楽解釈をする団体だけが残る結果となり、同じルールで技巧を競うスポーツ競技会の緊張も漂う中を、アマリリスQは順調に勝ち進み、三団体に絞られた本選に到達する。対立候補と目されたフランスのツァイーデQ（バンフ第三位）と共に、本選での演奏は些か安全運転ではあったものの、常識的に判断すればアマリリスQの優位は動かないと思えた。だが、ピヒラー審査委員長の発表した結果は、グランプリなし。「それぞれの団体が僅差で、名誉あるパオロ・ボルチアーニの名を冠するグランプリを授与すべき圧倒的な団体はないと判断せざるを得ない」という勇気ある説明に、熱しやすいイタリア聴衆がどこまで納得したかは定かではない。内部情報に拠れば、最高点はアマリリスQだったという。前回までの規定ならば、彼らは優勝だったろう。コンクール運のなさ、ここに極まれり。

安定した高水準VS煌めく才能

それから三週間後、暑いイタリアの夜に顔面蒼白となっていた第一ヴァイオリン以下アマリリスQは、真冬のメルボルンにいた。四年に二度開催される南半球唯一の国際室内楽コンクールは、雰囲気が他の大会とまるで異なる。若い頃に白豪主義の時代を過ごしたご隠居が一次予選の朝から会場となる音楽院講堂を満員にし、国営ABC放送が全ての演奏をFMで豪州全土に生中継。「室内楽のオリンピック」として人気を博している。英国植民地の最南端文化都市らしく、これまでは審査員も地元楽団関係者と英国系の長老が中心。ボルチアーニ大会で会場を沸かせながら本選に進めなかった団体がぶっちぎりの優勝を果たしたり、ロンドン大会で優勝した堅実な団体が一次予選で落ちたり。他の大会とはかなり異なる結果を出し続けてきた。プロの冷静な判断よりも、聴衆の嗜好が審査結果にストレートに結び付く傾向にあるのである。

大阪で優勝し転戦したアタッカQも加わる八団体の闘いは、そんな独特な雰囲気の中で熾烈を極める。本選に残った三団体は、アタッカQとアマリリスQ、それにレッジョでは二次予選止まりながらハンガリーのローカル性を振りまく音楽で関係者や聴衆をすっかり魅了した新星ケレマンQだ。会場の空気を眺める限り、アマリリスQにまたの悪夢が降りかかる可能性も感じられる。が、元ベルチャQのチェロ奏者やヨーロッパの弦楽四重奏教育の最前線を知る審査員らは、冷静にアマリリスQに悲願のグランプリを与える。才能まかせに突っ走る感もあるケレマンQは二位、アタッカQは三位となった。

メルボルンの予選は旧南メルボルン市庁舎の音楽院。
予選から聴衆で満員だ。

かくて、アマリリスQの長いコンクール遍歴の旅は終わりを告げた。彼らにはもう二度とコンクールの舞台で出会うことはないだろう。一方のケレマンQは、早速九月の北京へと転戦、いきなりザイーデQとの対決に臨むことになる。ひとつの旅の終わりは、また別の旅の始まりだ。アマリリスQのプロとしての音楽家人生は、やっとこれから。

JCMF NEWS

平成23年度 第1回評議員会・理事会開催

6月28日（火）ホテルニューオータニ大阪において、平成23年度第1回評議員会、理事会を開催いたしました。

午前11時からの評議員会では村上仁志評議員が互選で議長に、また午後1時15分からの理事会では秋山会長の挨拶のあと、土井理事長が議長となって、平成22年度の事業報告並びに決算報告、また内閣府に申請中の定款（案）の一部修正の議案についても審議、可決承認されました。

最後に事務局から5月に開催された第7回「大阪国際室内楽コンクール＆フェスタ」についての報告がありました。

評議員会

理事会

公益財団法人認定

かねてより申請していた公益財団法人への移行について内閣府の認定が得られ、11月1日の登記をもって「公益財団法人日本室内楽振興財団」と名称が変更になりました。

これに伴い、従来の「寄附行為」から新たに制定した「定款」により、評議員（会）と理事（会）の役割や任期などが大きく変更となっています。

また、主務官庁はこれまでの文部科学省から内閣府に変わりました。

府益担第６４３７号
平成２３年１０月２１日

財団法人日本室内楽振興財団
土井　共成　殿

内閣総理大臣
野田　佳彦

認定書

平成２３年４月５日付け申請に対し、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律（平成１８年法律第５０号）第４４条の規定に基づき、別紙のとおりの公益財団法人として認定する。

公益財団法人の認定書（別紙略）

グランプリ・コンサート2011

アタッカ・クァルテット（米国）
Attacca Quartet

「グランプリ・コンサート」は、3年毎に開催している「大阪国際室内楽コンクール＆フェスタ」の優勝団体を招いて全国10地区で公演を行っています。

今回は第1部門（弦楽四重奏）で優勝したアメリカのアタッカ・クァルテットが次の日程で演奏会を行います。

■開催日程■

札　幌	11月 4日㈮	STVホール
熊　本	11月 6日㈰	益城町文化会館
大　分	11月 8日㈫	別府大学大分キャンパス文化ホール
高　岡	11月10日㈭	富山県高岡文化ホール
三　重	11月12日㈯	三重県文化会館小ホール
兵　庫	11月13日㈰	淡路市立しづかホール
広　島	11月15日㈫	庄原市民会館
長　野	11月17日㈭	松本市波田文化センター
東　京	11月20日㈰	津田ホール
大　阪	11月22日㈫	いずみホール

■全国共通■

■主催/ 公益財団法人日本室内楽振興財団　TEL（06）6947-2184
■協賛/ Daiwa House・TOYOTA
■助成/ 公益財団法人 ロームミュージックファンデーション

公益財団法人日本室内楽振興財団 支援企業

大阪ガス株式会社
関西電力株式会社

三洋電機株式会社
住友電気工業株式会社
ソニー株式会社
株式会社東芝
日本電気株式会社
パナソニック株式会社
パナソニック電工株式会社
株式会社日立製作所
富士通株式会社
ローム株式会社

株式会社近畿大阪銀行
住友信託銀行株式会社
株式会社みずほ銀行
株式会社三井住友銀行
株式会社三菱東京ＵＦＪ銀行
株式会社りそな銀行

住友生命保険相互会社
東京海上日動火災保険株式会社
日本生命保険相互会社
三井生命保険株式会社

野村證券株式会社

アサヒビール株式会社
サントリーホールディングス株式会社
ハウス食品株式会社

東洋紡績株式会社
株式会社ワコール

伊藤忠商事株式会社
岩谷産業株式会社
株式会社千趣会
三菱商事株式会社

川崎重工業株式会社
株式会社クボタ
住友金属工業株式会社
ダイキン工業株式会社
日立造船株式会社
三菱重工業株式会社

株式会社日建設計

株式会社大林組
鹿島建設株式会社
株式会社きんでん
株式会社鴻池組
清水建設株式会社
大成建設株式会社
大和ハウス工業株式会社
株式会社竹中工務店

非破壊検査株式会社

大塚製薬株式会社
住友化学株式会社
積水化学工業株式会社
武田薬品工業株式会社
日本ペイント株式会社

近畿日本鉄道株式会社
京阪電気鉄道株式会社
南海電気鉄道株式会社
西日本旅客鉄道株式会社
阪急電鉄株式会社
阪神電気鉄道株式会社

株式会社ＪＴＢ西日本
株式会社電通
株式会社ニューオータニ

ＫＤＤＩ株式会社
西日本電信電話株式会社

株式会社読売新聞東京本社
株式会社読売新聞大阪本社
日本テレビ放送網株式会社
讀賣テレビ放送株式会社

（関連業種別50音順）

■「北のパリ」ワルシャワ■

ポーランドは中央ヨーロッパに位置し、北はバルト海に面し、西にドイツ、南にチェコ、スロバキヤ、東にウクライナ、ベラルーシ、リトアニア、ロシアの飛地領のカリーニングラード州と多くの国々と国境を接している。

その地勢の故か、この地は幾度となく世界の軍事的衝突、政治的対立の主戦場となり、国土の分割や消滅を繰り返してきた。民主化を果たして現在の共和国になったのが1989年のことである。

王宮広場　©ポーランド政府観光局

ワルシャワがポーランドの首都になったのが1611年。街の中心を流れるヴィスワ川沿いに発展を重ね、いまやポーランド最大の都市として政治、経済、文化の中心都市となり、「北のパリ」と称されている。ここはフレデリック・F・ショパン（1810？～ 1849）ゆかりの地。エリザベート王妃国際音楽コンクール（ベルギー・ブリュッセル）、チャイコフスキー国際コンクール（ロシア・モスクワ）と並ぶ世界三大音楽祭のひとつショパン国際ピアノコンクールが1927年から5年に一度開催されている。（表紙：ワルシャワ）

JTB Your Global Lifestyle Partner

美しい街並みを歩き
歴史や文化の変遷に
想いを馳せる旅。

むかしからある、代々受け継がれてきた土地には
現代に生きる私達の心を奪うような、
魅力ある街の営みに触れることができます。
古く美しい街並、時代の空気を感じさせる建築物や工芸品、
郷土料理やアートカルチャーなど…
それは、まるでオーケストラが1つの楽曲を奏でているかのよう。
私たちJTBは、
世界各地で奏でられる魅力的な楽曲に想いを馳せる、
心躍る旅のお手伝いをします。

JTB西日本
海外旅行西日本支店
〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町3-1-8(本町クロスビル9階)
TEL.06(6252)2711(代) FAX.06(6252)2790
担当:飛松 智久

●編集・発行／公益財団法人 日本室内楽振興財団
〒540-8510 大阪市中央区城見2丁目2番33号 読売テレビ内
TEL.(06)6947-2183 FAX.(06)6947-2198
ホームページ http://www.jcmf.or.jp
e-mail zaidan@jcmf.or.jp

VOL.36
平成23年11月7日